Bibliomania

●読書インタビュー

読書について町田先生にインタビューしました。

Ⓠ普段どんな本を読みますか？
Ⓐ小説（推理小説）
Ⓠお気に入りの作品は？
Ⓐ『あぁ無情』
Ⓠその作品のあらすじを教えてください
Ⓐパンを一欠片盗んで逮捕されたジャン・バルジャンが更生して生きていく話です。
Ⓠその本のお気に入りの点は？
Ⓐそれぞれの立場からの主張の共感性が高い点です。
Ⓠ本はいつも買ってますか？借りますか？
Ⓐ買っています。
Ⓠ現在どのくらい本を持っていますか？
Ⓐ10冊
Ⓠ学生の頃読んでた本で記憶にあるものはありますか？
Ⓐ星新一さんのショートシュート
Ⓠどんなところが記憶に残っていますか？
Ⓐ話の終わり方の不思議さ
Ⓠ本を読む良さとは何だと思いますか？
Ⓐ心を落ちつかせることができるところです。

《インタビューの感想》

質問をしてみて、知らなかった本などを新しく知ることが出来て良かったと思いました。町田先生の話にあった作品・作家を調べてみると、『あぁ無情』は、逆境を生き抜く不屈の男に悲劇的な美しき母娘と彼らの愛を絡ませた、ハラハラドキドキのストーリー、星新一さんは斬新な発想と奇抜な結末をそなえたショートショートの第一人者で、ミステリーやＳＦ、時代小説を書いていることがわかりました。これらの本は図書館にもあります。私も、もっと色んな本を読んでみようと思いました。町田先生ご協力ありがとうございました。

（23ＨＲ　青島・橋本）

●貸出傾向（四月～十月末）

①貸出回数が多い本

1位　11回　尾木直樹
『「ケータイ時代」を生きるきみへ』

2位　9回　中馬清福
『日本の基本問題を考えてみよう』

3位　8回　夫馬賢治
『超入門カーボンニュートラル』

4位　7回　出井伸之『日本進化論』
池上彰　『伝える力』
鈴木真幸
『超入門版！誰でもわかる解剖学』

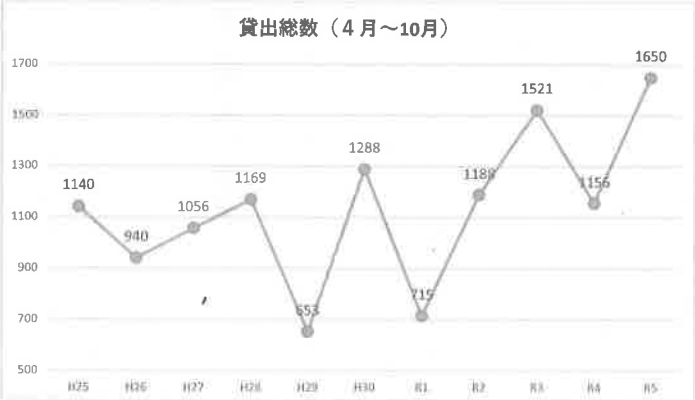
②貸出が多い分類

1位　589冊　文学
2位　312冊　社会科学
3位　173冊　芸術
4位　167冊　自然科学
5位　154冊　哲学

③貸出回数が多い著者

1位　47回　鎌池和馬
2位　27回　東野圭吾
3位　23回　湊かなえ
4位　11回　尾木直樹

図書館の貸出冊数のデータを見ると、四月から十月までは一六五〇冊で、昨年より五〇〇冊ほど増加しました。これは本校開校以来最多の記録となっています。今年は全学年六クラスになり生徒数が減少しました。それにもかかわらず貸出冊数が増加したということは、生徒一人あたりの平均貸出冊数が増えているということになります。実際にデータを



見てみると、昨年は一・五冊でしたが今年は二・三冊となり、やはり昨年より〇・八冊も増加していることがわかりました。

分類別貸出冊数のデータを見比べてみた結果、本のジャンルも変化していることがわかりました。数年前まで文学が約七割近くを占めていましたが、今年は約四割未満に減少しました。文学の割合が減少しているのに対し、社会科学の割合は数年前までは約五パーセントでしたが、今年は約二十パーセントと四倍も増加しました。文学だけでなく社会科学の本も読まれるようになったことがわかります。社会科学の本は、私たちが暮らしている社会を研究したことについて書かれているものです。

授業での利用も増加理由の一つですが、それだけでなく身近な物や社会問題などの研究に興味を持つ人が増えたと言えます。

図書館の貸出冊数が増加していることは喜ばしいことではありますが、一人あたり二冊しか読んでいないと考えるとまだまだ少ないと思います。図書館は私たちの教室か

ら離れている場所にあるため行くのに抵抗があるかもしれません。それ以前に、そもそも本に興味がないという人も少なくはないでしょう。しかし、図書館には数え切れないほどの本があるため、興味がないという人にも気になる本があると思います。まだ授業くらいでしか行ったことがないという人には、ぜひ一度図書館に来てみて下さい。

（25ＨＲ　石ケ谷・内野）

●芸術鑑賞教室

今年度の芸術教室は「学校寄席」、桂宮治さん、柳家𠮟三郎さん、笑福亭茶光さんの落語と鏡味味千代さんの太神楽を楽しみました。私は初めて生で落語を聞き、これまで落語のような日本の伝統芸能に触れる機会があまりなかったため、とても貴重な時間を過ごすことができました。特に印象に残っていることが二つあります。

一つ目は、落語の歴史についてです。寄席入門の際に、落語家の柳家𠮟三郎さんから詳しく説明していただきました。落語は、まだスマートフォンやテレビなどの電子機器がない江戸時代に発展したものです。普段、私たちは様々な機器を利用することで、楽しい時間を過ごしたり、退屈を凌いだりすることができます。しかし、江戸時代には、そのような便利な機器が無く、人々は娯楽に飢えていました。特に、蝋燭の光だけが暗闇を照らしてくれる夜に人々は楽しさを求めたそうです。そうして出来上がったのが落語です。このような歴史を知ったことで、落語に対する印象や、物語の深みがさらに変わっていくように感じました。

二つ目は、落語家の方々の一つ一つの表現です。落語家は、ただ物語を語るのではなく、様々な役を演じます。小さな子供から老人、時には国の一番偉い殿様など、一人で

何役も演じなければなりません。とても難しいことですが、落語家の方々は、それを巧みにこなしていました。顔の向きや目線を変えることで、役柄が変わったり、手や足の動作を入れることによって感情の大きさを表現したりと私たちが目で見て楽しめる工夫が沢山ありました。また、扱う道具が扇子一本だけだというのに、まるでそこに存在しているかのように蕎麦を食べたり、お椀を持っていたりする表現に驚きました。

私は、今回の鑑賞教室を経て、落語の楽しさや面白さを学びました。それと同時に、沢山の歴史や人の想いが現在まで語り継がれて日本の伝統芸能が生まれたということも学ぶことが出来ました。遠い昔の人々が何を感じ、何を願ってきたのかを想像しながら聞く落語は、とても面白かったです。想像力を沢山働かせた一日になりました。

《関連本の紹介》

山本進さんの『「落語」のすべてがわかる落語ハンドブック』を紹介します。落語についての歴史や物語が分かりやすく解説された本です。第一部から第五部までの構成になっているため、時間をかけてじっくりと読み進めることができます。

特に、第三部の「名作の鑑賞」では、様々な種類の落語の話が解説付きでまとめられています。有名なものであると「寿限無」や、「饅頭怖い」また、芸術鑑賞教室で聞いた「つる」や「初天神」などの話も楽しむことができます。

今回の芸術鑑賞教室をきっかけに、この本で日本の伝統芸能に触れてみてはいかがでしょうか。図書館の芸術コーナーにありますので、是非手に取って読んでみてください。

（21ＨＲ　中澤・鳥羽）